

今月の授業：

空間認識を育てる タッチボールの授業（3, 4年生）

構成・文 岩崎英夫（東京支部）

1. 「タッチボール」について

- ・ マットを2mくらい離して2枚置く。それがゴール。向かい合った形で10～15mはなして、また2枚ずつ置く。（「最初に、1枚ずつで『守り、攻め』の方向などシンプルな状態で学び、その後2枚ずつ」という指導過程もある。東京の多摩サークル案では、ゴールは1対から2対へ移行させる）

①ゲームの開始

- ・ じゃんけんで先攻後攻を決める。

②得点

- ・ 自分のマットからボールを持って走り、相手のマットにボールを付ければ1点。

③タッチルール

- ・ 相手チームが、走ってくる子をタッチすればその子は動けない。（そこでパスをする。パスの必然性）

④人数

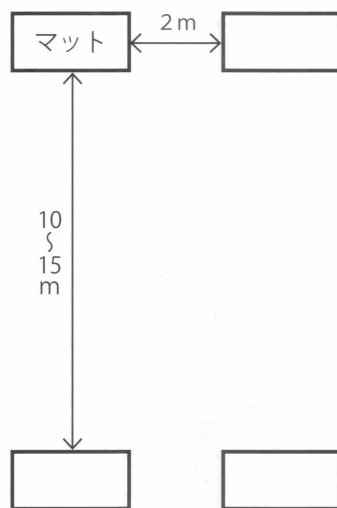
- ・ 最初は2人対2人。その後、3人対3人にする。

⑤時間

- ・ 3分ハーフ
- ・ 得点後は相手ボール。（すぐに、ボールを持って走る速攻が最初は有効）

⑥コート

- ・ エンドラインやサイドラインはない。フリー。



2. ゲームの様相

■第一段階

- ・ 相手をかかわして得点（ワンマン型、速攻型）

最初は、ワンマンの子がボールを持って得点しようとする。しかし、その子がワンマンだとわかると相手チームは、みんなでその子にタッチしにくる。2人又3人でタッチにくるのでよけきれなくなる。（教師がワンマンの子がいる相手チームに対して、「みんなでタッチして〇〇さんを止めよう」と助言してあげる）



■第二段階

・居残りにパス

相手が得点したすぐ後に、相手ゴール近くに居残りをしている子に、縦パスを送り、得点する。とても効果的である。この作戦が出てこない場合は、負けているチームに、こっそり「居残り作戦」を教えてあげる。そのことで得点できるチームがでると、この作戦は多くの班に取り入れられるようになる。また、多くの班が、得点がとれていない子を居残りにする。

この作戦により、全員が得点をあげることができる。

この段階では、ゴールのマットが2枚であることは、まだ効果的に使えているとはいえない。



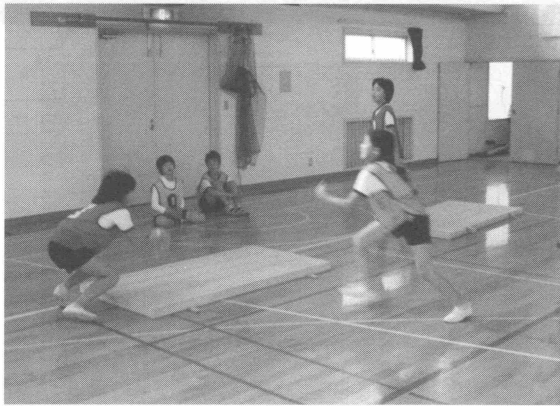
■第三段階

・居残りにマークがつき、縦パスが通らなくなる。そこで左右のパスにより得点する。逆サイド空間を意識するようになる。2枚のマットを効果的に使うようになる。

右のマットを攻めていると、左のマットの守りが手薄になる。そこで、左マットにパスを送り、得点をする。



走りながら逆サイドの味方を見ている



右サイドに相手をひきつけている。左サイドで味方のパスを待つ。



←相手がタッチにくる前に得点できる。

速攻と組み合わせて、逆サイドの味方にパスをするようになる。



←右サイドから左サイドの味方にパスをして得点した場面

「タッチボール」は、ゲームをする中で、速攻のよさがわかり、縦パス居残り作戦が効果的だとわかる。また速攻や縦パス作戦が相手チームに読まれ、素早く守りにつかれると、右のマットと左のマットを効果的に使えるようになっていく。このゲームは、ボール操作技術として、「投げる」「とる」だけで、シュート技術は必要としない。このため、ボール運動で大切な「時間（いつ）」「空間（どこ）」に動いたり投げたりすればいいかを集中的に学習できる。

〔わかってほしい内容〕

- ①相手から離れた場所でパスをもらおうとよい。（ノーマークの位置）
- ②味方から離れた場所でパスをもらおうとよい。（逆サイドの意識）
- ③味方がゴール近くに動いた瞬間にパスを出すとうよい。（タイミング）
- ④パスの有効性がわかる。（縦パス速攻⇒逆サイド）

（いわさき ひでお／東京・日野市立滝合小学校）